

夢

南部修太郎

青空文庫

五月のある晴れた土曜日えうの夕方がただった。いつになく元きのいい、明るい顔かほ付つきで勤つとめ先から帰かへつてたM会社くわいしやあん社員しやんの青木あおきさんは、山の手てのある静しづかな裏うら通りとほにある我家わがやの門口かどぐちをはひると、今まで胸むねに包つんでゐたうれしさを一時じに吐はき出すやうにはしやいだ声こゑで奥おくさんの名なを呼よんだ。と奥おくさんはびつくりした様子やうで小走はしりにそこへ迎むかへ出てた。

「お帰かへんなさい。——いつたいまあ何なんなの？ いきなりそんな大きな声こゑをなすつて……」
さうたづねかけながら、奥おくさんは女学がくせい生せいらしさのまだ十分にぬけきらない若わか々くしいひとみを青木あおきさんに投げかけた。

「いゝ事こと、素適すてきな事ことがあるんだよ。」

さう答こたへて玄げん関くわんにあがると、機嫌きげんのいい時ときにするいつもの癖くせで、青木あおきさんは小柄がらな奥おくさんの體からだを軽かるく引き寄せながら、そのくちびるに短みじい接せつぶんを與あたへた。

「まあ、何なんんでせう？」

奥おくさんはたくましい青木あおきさんの肩かたに片手かたてをかけたまゝこびるやうにその顔かほを見み上げた。

「うむ、あれさ。あれをとうとう今日けふ受けとつて たんだよ。」

「あれつて？」

「ほら、あれさ。」

「ああ、わかつた。うれしいわね。——どんな番号だつて？」

「それがさ、馬ばかによささうな番号がうなんだよ。——ちよつとお待ち……」

さういひながら、玄げんくわん関つゞきの茶ちやの間まへはひると、青木あおきさんは紙かみにくるんだ額面がくめん十円の△△債券さいけんを背広せびろの内うちがくしから、如何いかにも大事じさうに取出とりした。

「これなんだよ。——ほらね。ちの一万二千三百七十五号がう、何なんだかい、番号がうだらう？」

「ちの一万二千三百七十五号がう、さうね、ほんとにいゝ番号がうだわ。」

奥おくさんは晴はれ晴ばれしくひとみを輝かがやかしながら、暫しばらくその額面がくめんに眺ながめ入いつてゐた。

「何なんだかあたりさうね。」

「さうなんだ。僕ぼくはその番号がうを一目見みた時とき、直感ちよくかん的てきにさう思おもつたね。」

青木あおきさんは興こうふん奮ふんした声こゑでさう相あひづち打うつた。

「あたつたら、実じつ際さい素適すてきだな。」

「素適すてき以上いじやうだわ。——一万二千三百……」

「……七十五号がう。第一だいいち、五ごがつくのなんて半端はんぱな処ところがなくて馬ばかにいいよ。」

「さうね。ちの一万二千……」

青木さん夫婦はこの頃でない張りのある、明るい持で、希望と信頼の笑顔を互にちつと見交し合つた。

従兄妹同志で恋し合つて、青木さんの境遇にすれば多少早過ぎましたのであつたが、互に思ひつめた若々しい熱情のまゝに思ひ切つて結婚生活にはいつた二人は、まる三年間を《へ》たその頃になつて、可成りな生活難にとらはれてしまつた。といふのは、少年時代に両親に死に別れた一人つ子の青木さんは、僅かなその遺産でどうか修学だけは済ましたものの、全く無財産の身の上だつた。で、新婚生活は七十円足らずの月給で始められたが、間もなく女の子が生れた上に、世間的な物價騰貴で、その後の暮しはだん／＼苦しくなるばかりだつた。そしていつとなく青木さん夫婦は、かつては夢にも想像しなかつた質屋の暖廉くぐりさへ度重ねずにはゐられなくなつてしまつた。

「いやだいやだ。僅かな金で月々こんなみじめな思ひをさせられるなんて……」

月末が近づくと、青木さんはいつも暗い顔付でそんな事をつぶやきながら、ため息づいたり、いらだつたりした。そしてそんな時、人のいい《き》の弱い奥さんは何の詞もなくたゞまぶたをうるませてゐるばかりだつた。

相当さうたうな身柄みがらの家に育いへつただけに青木あおきさん夫婦ふうふは相方さうほう共に品しなのいい十人なみ並なみな容姿ようしの持も主ちぬしで、善ぜん良りやうな性格せいかくながらまた良家りやうかの子こらしい、矜持じやんぢと、幾いくらか見えみを張はるやうな質きしつもそなへてゐた。で、世間眼せけんがんにすれば、どこにも生せい活くわつに苦くるしんでゐるらしい様やう子は感かんじられないのであつたが、もとより切りきつめた、地道ぢみちな所しよ帯持たいもちなどには全ぜんくならされてゐない二人ふたりにとつては、それだけにその苦くるしみや不快くわいさが一いっそう深ふかかつた。とりわけ空想家さうかで何なにかの趣味しゆみ道楽みだうらくなしには生きられない青木あおきさんにとつては、ただ金かねに追おはれてばかりゐるやうな、あくせくした日々ひびの生せい活くわつがむしろのろはしいくらゐだつた。しかし、月給ぎふの上うへの見込みこもなかつたし、ボオナスも減へるばかりの上に、質屋しちやや近ちかしい友達だちからの融通ゆうつうもさうさうきりなしとは行ゆかなかつた。結局けつぎよく、このまゝ暮くらし續つづけて行ゆくとしたら？ さう考かんがへた時とき、二人ふたりはせうさうをはげしい心かんに感かんじた。「やつぱり金かねだ。少すこしでも生せい活くわつに余裕よゆうのつけられるやうな金かねが欲ほしいな。」
 表へうめん面めんにこそ見みせなかつたが、青木あおきさん夫婦ふうふの頭あたまにはさういふ思おもひがいつも一杯ぱいだつた。そこへ突とつ然ぜん一つの誘惑いうわくとして現あらはれたのが、政府せい発はつ行かうの△△債券さいけんを買かふ事ことだつた。それはある日ひ会社きもち持つよを強つよく刺しげきした。悲運ひうんな者ものにめぐつてくる時ときならぬ福運ふくうん、そんな事ことまでがしきりに考かんがへられた。そして、奥おくさんの熱心ねつな賛成さんせいを得えた上で、苦くるしい内うちか

ら漸く工面して、非常な期待とともに買ひ求めたのが、ちの一万二千三百七十五号といふたつた一枚の、その△△債券なのであつた。

背広を軽いセルのひと衣にぬぎ換て、青木さんが奥さんと一緒につましやかな晩さんを済ましたのはもう八時近くであつた。青木さんはすぐに縁の籐イスに身を寄せて煙草をふかしながら、夕刊を読みはじめた。やがて台所の片づけ物を済ました奥さんは次の間に寝かしてある子供の様子をちよつと見てくると、また茶の間へはいつて、障子近くに引きよせた電燈の下で針仕事にとりかゝつた。静かなよひで、どことはなしに青葉の香をにほはせたかぐはしい夜風が庭先から流れてくる。二人の間にはそのまま暫らく何の詞も交されなかつた。

「ほんとに 持のいゝ晩だな。」

間もなく夕刊を縁に投げ出した青木さんはさうつぶやきながら、奥さんの方を振り返つた。

「ええ、ほんとにね……」

奥さんは針の手を休めて、静かに答へた。

刹那に、二人の口元には何とない微笑が流れあつた。さつきまでの 持の興奮はいつ

となくさめかかつてゐるが、それは心のどこかにまだほのかな明るさを投げかけてゐた。そして二人は暗黙の内にもお互が何物かの中にぴつたりとけあつてゐるやうな、その日頃がない甘い、しみじみした幸福感をそれぞれに感じてゐた。言葉はそれなりに途切れて、青木さんは庭の暗やみの方に眺め入り、奥さんは針の手を再び動かさしはじめた。

「でもね、あなた？」

やがて奥さんはまた口を切つた。

「何？」

「あれ、ほんとにあたるでせうか？」

「さあ、そりや分らない。すべては運命の神様の御意のまゝなんだからな。」

青木さんはちよつとさびしさうな表情でいつた。

「だつて……」

「いや、だからさ。僕はやつぱりあたるものと信じるな。信じるだけでも、今の僕達には楽しいんだからね。ははははは……」

青木さんはうつろな声で笑つた。

「ええ、そりやほんとにさうね。」

奥おくさんは一心いちしんに針はりを動うごかしながら、うつ向むかいたままさういつた。

「でも、若もしほんとにあつたら？」

「そりやうれしいね。飛とびあがつて、
《きちが》ひのやうにおどりまはるかも知しれな
いよ。」

青木あおきさんの声こゑは何なんとなく上ありつてゐた。そして、わぎとらしいはしやぎ方かたで身からだ體たいをゆす
ぶりながら笑わらつた。

「だがね、うれしいどころか、反はん対たいに凄すこくなりやしなやか知ら？ 一とう等とうだと二千円——
僕ぼくの二年分の給料きふれう以上のお金かねがいきなり懐とに飛とびこんでくる……」

そこで言葉ことばを途切とぎつて、青木あおきさんは不意いに眞顔まがほになりながら、ちつと奥おくさんの顔かほを見詰み
めた。

「何なんだかこはいやうね。——さうさう、いつかあつたぢやないの？ 千円せんげんかの無む尽じんにあた
つて発はつ狂きやうしたといふおぢいさんが……」

「はははは、僕ぼく達たちはそんなに《き》が小こさかあない。しかしいいな。今いまそれだけのお
金かねがあつたら……」

「ほんとにさうね。あたしお借かりしてある方かたのを、一いち番ばんにお返かへししたいわ。」

奥さんは針の手を無意識なやうに膝に休めて、ほの白んだ、硬張つた顔を青木さんの方に向けながら、眞剣な声でいつた。

「そりや無論だね。」

青木さんは強く相槌打つた。

「それから、あなたどうなすつて？」

「さあ、ヴィクタアを買ふね。武井の持つてるやうな……」

「ええ、ヴィクタアはいいわ。ずるぶん欲しがつてらつしやるんだから。——あたし、何にしようか知ら？」

「君の欲しいのはやつぱり着物かな？」

「あら、着物なんかいらなくつてよ。——さうね、あたしの今一番欲しいのは上等の乳母車よ。ほらキルビイさんのお宅にあるやうな。あたし 《れい》子をあんなのに乗せてやりたいわ。」

「しかし、乳母車なんてお安い御用さ。」

「それから、柳のイスやテエブルを一組と、茶だんすのいいのを欲しいわね。」

「さうださうだ。イスやテエブルは第一番だな。だが、さうなると、紅茶器なんかの上

等も欲しくなる……」

「あら、それぢやきりが無いわね。」

奥さんは朗かな声で笑つた。

そのまま暫らく詞は途切れた。青木さんも奥さんも明るい、楽しげな表情で、身動きもせず考へこんでゐた。

「でもね、美奈子。二千円あつたら、どうにか家が建てられるかも知れないよ。そしてそんな一つ一つの品物なんかよりも、考へてみりや、その方がずっと根本的な事だと思ふ……」

「ああ、ほんとにさうだわ。幾ら道具が立派だつたつて、こんな家ぢやあね……」

奥さんはあたりを見まはしながらさういつてやんちやらしくひよいと首をすくめた。

「で、建てるとなると、やつぱり郊外ね。」

「うむ、そりやさうだとも。大井だの目黒だの。僕すきだな。あすこら辺のちよつと高みに、バンガロオ風の家でも建てられたら、どんなにいいか知ら？」

「とても素適だわ。」

奥さんは高く声をはづませた。

「全く悪くないね。間数はと？ 僕の書斎兼用の客間に君の居間、食堂に四畳半ぐらゐの子供部屋が一つ、それで沢山だが、もう一つ余分な部屋が二階にでもあれば申分ないだね。そして庭はなるだけ広くとつて芝生にする。花壇をこしらへる……」

「あたし、野菜畑も作りたいわ。」

「いいね。普通の野菜物は無論として、外にトウモロコシだのトマトウだの、トマトウのとり立てつて、ほんとにおいしいからな。」

「さうね。それからダリヤも思ひつ切り植てみたいわ。」

「うむ、六七月頃になると、それを切花にして客間に飾る……」

「ああ、どんなに奇 《きれい》でせう？」

奥さんは黒末勝ちな、若々しいひとみを夢見るやうに見張りながら、晴れやかにつぶやいた。

言葉はまた暫らく途切れた。と、程近くのイギリス人の家でいつとなく鳴りはじめたピアノの音が、その沈黙をくすぐるやうに間遠に聞こえてた。それに聞くともなく耳を傾けながら、青木さんは靜に煙草をふかし、奥さんは針の手を休めたまま、互にうつとりと今までの空想の跡を追つてゐたが、その空想はなぜかだんだんに影を薄めて行つた。

そして、二人の意識の中にはたつた三間しかない古びた貸家である自分の家が、ほんとに猫の額ほどの庭が、やつとの思ひで古道具屋から買って、ただ一脚のトイスが、いや、あまりにもそれとかけ隔たつたさういふみじめな現実のすべてがうつすりとよみがへつてた。

「さうさう、それからねえ……」

やがて青木さんはその冷やかな現実の意識を逃れようとするやうに、新たな空想をゑがきながら、奥さんを振り返つた。

「何？」

「さうなつたら、何か小鳥も飼はうぢやないか？ カナリヤ、目白、いんこ……」

「ええ、それもいいわね」

奥さんの声にはもう何となく張りがなかつた。そして、そのままひぎに視線を落とすと、思ひ出したやうにまた針の手を動かして始めた。

「しかし、いいな。若しすべてがそんな風に行つたら、ほんとにどんなに楽しい、どんなに美しい生活だか知れないな。——一日でもいいから、たつた二日でもいいから……」

青木さんはふと一人言のやうにさうつぶやいて、軒先に見える晴れた夜空をちつと見上

げた。が、さういふ空想の明るさとは反対に持は妙に暗く沈んで行つた。

奥さんは青木さんのさういふ持をすぐに感じた。そして、青木さんの横顔に――
夜やみの中に浮んでゐるくつきりした横顔にちらと視線をそゝいだが、すぐに眼をし
ばしばさせて、くちびるをかみながらまたうつ向いてしまつた。

「しかし、そりやさうとして、何とかくじがあたらないものかな？ 今の僕達には何
等だつて構はないんだ。ねえ、さうだらう？」

青木さんは不意に奥さんの方を見返つた。

「ええ。――ですけれど、もうそんな話しよしませう。あたし何だか……」

奥さんはうつむいた俣いつた。

「どうしたの？」

「いいえね。幾ら思つてみても、そんな事、あたし達には駄目なんですもの……」

奥さんはかすれたやうな声で答へながら、青木さんの顔を見上げた。

そのせつ那に、奥さんのまぶたに一杯にじんでゐた涙にひよいと《き》がつくと、今
まで何《なにげ》なさを装つてゐた青木さんの心は思はずよろめいた。青木さんはあわ
ててイスから立ち上つた。が、すすり泣きはじめた奥さんの肩に手をかけると、また心を

とり直しながら、力強く、慰めるやうにその耳元にささやいた。

「そ、そんな事考へちやいけない。僕達はせめてさういふ夢でも楽しんでゐたいぢやないか。——それにまた、思ひ掛ない巡り合せで、人にはどんな好運が向いてないとも限らないからね……」

、、、、、、

それから半年ほどたつた時、ちの一万二千三百七十五号の△△債券は仲買人を《へ》て、ある田舎の大地主の手に渡つてゐた。青木さん夫婦は僅かな金の融通のために仕方なく手離したのであつたが、それが間もなく五等百円のくじにあつた事は無論知るはずもなかつた。

青空文庫情報

底本：「旬刊 寫眞報知 第三卷第十二号」報知新聞社出版部

1925（大正14）年4月25日発行

初出：「旬刊 寫眞報知 第三卷第十二号」報知新聞社出版部

1925（大正14）年4月25日発行

※UCV3は、「未」の「二」に代えて「三」と「未」の統合を規定していますが、この規定は誤りとみて、外字注記にはUnicodeを記入しませんでした。

入力：小林 徹

校正：鈴木厚司

2012年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夢

南部修太郎

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>